

鎌倉末・南北朝期の法隆寺と延年

坂井孝一

はじめに

「延年」とは、中世の寺院において、法会などの後で余興的に行われた僧侶による各種の芸能のことである。本来は、貴族の遊宴の場で、「遐齡延年」すなわち長寿を招来し祝福するための芸能として行われたものであったが、院政期以降、寺院社会にとりいれられ、中世には僧侶によって行われる単純・素朴な歌舞劇の形式を持った芸能として定着した。

大和国多武峰寺には、中世末の作とされる『多武峰延年詞章』⁽¹⁾が残されている。これは「大風流・小風流・開口・当弁・連事」といった各種の延年芸能の台本である。このうち大小の「風流」は、劇としては単純で稚拙ではあるものの、「能」に通じる構成や内容を持っており、これは延年芸能が、観阿弥・世阿弥によって大成される以前の「猿楽能」と何らかの交渉を持ち、何らかの影響関係にあったことを示唆するものである。従来の延年研究はこのため、猿楽能の成立過程の解明という視角によってなされたものが多く、延年それ自体の研究はおろそかにされる傾向が強かった。しかし、鎌倉期の史料は断片的なものばかりである上、史料解釈の点でも研究者の間で統一的な見解が見い出せず、現在こうした視

角による研究は行き詰まりを見せている。

一方、寺院史研究の盛行に伴い、延年そのものを寺院社会の秩序の中に位置付けようとする動きが現れてきた。松尾恒一氏による一連の研究⁽³⁾はその代表的なものである。氏は、延年の詞章を分析するだけでなく、「延年会」全体の性格を分析することの重要性を指摘され、そうした観点から、「延年会」が「一味和合」「一味同心」の精神に基づく衆徒の蜂起・集会の作法に源を持つものであったこと、したがって決して単なる慰安的な余興のための芸能ではなく、極めて儀礼的性格の強い「祝祭」ともいえるべき行事であったこと、とくに院政期・鎌倉初期という寺院における延年の発生期には、勢力を拡大した衆徒層の寺家政所に対する政治的なデモンストレーションとしての意義を有していたこと等の点を明らかにされた。氏はまた、鎌倉末から南北朝・室町期と時代が下るにつれ、政所側が衆徒の祭儀を積極的に取り込むようになったため、延年が元来持っていた政治行動としての有効性は失われ、会の開催は衆徒と政所の協力態勢で行われるようになったこと、その場合、会の目的は賓客に対する饗応と、僧侶の任官・昇進に際しての祝賀であったこと等の点についても解明された。さらに、従来、遊芸を「道」とし猿楽座のような組織を持った存在とみなされていた「遊僧」についても、他の寺僧と同様寺院の臈次階梯組織に組み込まれた存在であり、猿楽座のような芸能集団とは分けて考えるべきであると主張された。

氏のこうした精力的な研究は、着眼点といい、考察の方法といい、極めて斬新で示唆に富むものである。筆者自身大いに刺激を受け、別稿⁽⁴⁾において『嘉元記』に見える鎌倉末・南北朝期の法隆寺の延年の担い手について論じてみた。その結果、当該時期の法隆寺の延年を担っていたのは、遊芸を自らの「道」とする僧侶「遊僧」ではなく、芸能に堪能な僧侶「狂僧」が「遊僧」に質的变化を遂げる過程の、言わば過渡的な存在であったという結論を得た。そして、その歴史的背景として、延年及び延年会そのものの変化と、鎌倉末期の法隆寺々内における寺僧組織や僧侶集団の変化を想定した。本稿はその続稿ともいえるべきものである。

さて、当該時期の法隆寺の延年の実態を考察する上で最も重要な史料は『嘉元記』・『請雨舊記』である。したがって、本稿においてもこの二つの史料を中心に論を進めることになるが、必要に応じて『寺要日記』・『寺務御拝堂注文』・『寺務拝堂舊記』・『法隆寺別当次第』等の記録や編纂物等を参照することにした⁽⁵⁾。

一 法隆寺の延年僧の概要

延年僧の実態という問題に関して、前稿では紙数の制約の関係上、特徴のある人物を抽出して論じるという方法をとった。本稿では、そこで触れ得なかった人物についても何らかの形で言及し、出来る限りその全体像を明らかにしてみたい。そのためにまとめたものが次の表である。前稿でも述べた如く、延年僧の名前を確認できる史料には『嘉元記』及び『請雨舊記』の(イ)延年三年四月五日条・(ロ)正和五年九月廿九日条・(ハ)元応三年(＝元亨元年)九月廿五日条がある。この表は、これらの記事に登場する延年僧の寺内における地位・職務、活動内容などの概要をまとめたものである。

僧名	内 容	出 典
①永縁房	祈雨のための龍池社への参籠衆 聖靈院での雨悦の延年で供奉衆	【請】元応三・八・八 (ハ)
②願識房乗弁	住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「王の舞」 聖靈院での雨悦の番論義で問者 聖靈院での雨悦の最勝十講で転読衆 富河之高橋の供養で三礼 金堂預に補任(他界した「有朝」の関分) 僧綱三口の寄進によって権律師に補任	(イ) (ハ) 【請】建武四・八・廿四 貞和三・十一・六 正平七・正・十一 延文二・十一・廿二

	<p>金堂内陣の高机を鵜庄年貢で新調した時の金堂預 五師年会所の評定に「権律師乗弁」と署判 正和年中に「中門ノヲリノ会」を始行 晦講の新頭の一人</p>	<p>康安二年中 〔伍〕貞治三・十・十六 〔寺〕正・一 〔寺〕正・晦</p>
③教賢房有玄	<p>住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「仕丁」 聖靈院での雨悦の延年で東飯屋猿樂衆 和泉国高石新左衛門・播磨国八木四郎左衛門による鵜庄押領事件が発生した際、雑掌と して庄家に下向 五師の一人として「大法師有玄」と署判 正和年中に「中門ノヲリノ会」を始行 晦講の新頭の一人 別当の印鑑を扱う在庁法橋良玄の代官「有玄教賢房」として</p>	<p>〔イ〕 〔ロ〕 貞和一・十一・廿七 〔伍〕貞治三・十二・十八 〔寺〕正・一 〔寺〕正・晦 〔別〕良寛法印の文保二</p>
④堯玄	<p>聖靈院での雨悦の延年で東飯屋猿樂衆 正和年中に「中門ノヲリノ会」を始行</p>	<p>〔ロ〕 〔寺〕正・一</p>
⑤堯識房	<p>住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「神官」・他の記事なし</p>	<p>〔イ〕</p>
⑥賢良房	<p>住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で乗馬の「巫」 実性院堂での如法經の供奉衆（同日、惣社前で延年・風流あり） 折雨願課の相撲に関する評定衆 聖靈院での雨悦の延年で供奉衆</p>	<p>〔イ〕 文保三・三・廿一 〔請〕元応三・九・十六 〔ハ〕</p>
⑦頭禪房性憲	<p>住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「師子」 弓射のため廻廊に懸けた行者講衆の的を「衆分」として切り落とすが、逆に法喜房によ って刃傷される（法喜房は罪科） 聖靈院での雨悦の最勝十講で転読衆 絵殿預に補任（「範尊五師」の闕分、この時「得業」） 富河之高橋の供養で唄師</p>	<p>〔イ〕 正和四・二・廿九 〔請〕建武四・八・廿四 貞和二・正月中 貞和三・十一・六</p>

	<p>上堂正面間格子一間新造の施主（この時「律師」） 他界（享年「七十歳」） 晦講の新頭の一人</p>	<p>文和三・四月中 文和三・五・廿七 【寺】正・晦</p>
⑧ 顯了房	<p>住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「大衆（開口）」 強盜事件に関する龍田での大落書に「開衆」の一人として出仕 祈雨願課の相撲に関する評定衆 聖靈院での雨悦の延年で供奉衆 覚宗房寺主子息春力殿が顯了房五師の子息春藤殿を刃傷した事件</p>	<p>（イ） 延慶三・七・十七 【請】元応三・九・十六 （ハ） 暦応四・正・十九</p>
⑨ 淨舜房長盛	<p>住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「中綱」 聖靈院での雨悦の延年で東飯屋猿衆衆として「開口」 聖靈院での雨悦の番論義で講師 聖靈院での雨悦の延年で「開口」 強盜事件に関する龍田での大落書に「開衆」の一人として出仕 実性院堂での如法經の翌日に行われた十種供養の導師 「東使出羽入道」が出した「鵜庄一円奉寄之状」の請取使の一人 聖靈院での雨悦の最勝十講で転読衆 舍利預の一臈湛舜僧都が他界した記事に関連して「三臈預長盛已講」・「舍利預」</p>	<p>（イ） 延慶三・七・十七 文保三・三・廿二 嘉暦四・三・廿七 【請】建武四・八・廿四 文和三・八・廿九／九・十五／十・二 貞和三・五・五 【寺】正・十一 【寺】正・晦 【寺】暦応三・三・廿一</p>
⑩ 淨泉房有朝	<p>三教院世親講始行の施主（延文二年「他界七十四歳」の注記） 貞和五年正月十一日の所々講の請定案で「惣社」を担当 晦講の新頭の一人 聖靈院御影供始行の施主 住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「大衆（後見）」 強盜事件に関する龍田での大落書に「開衆」の一人として出仕 祈雨のための龍池社への参籠衆</p>	<p>（イ） 延慶三・七・十七 【請】元応三・八・八</p>

	<p>聖霊院での雨悦の番論義で問者 聖霊院での雨悦の最勝十講で転読衆 五師の一人 西南院五師として、「青龍寺領」は法隆寺の領内ではなく「当院家之私領」と主張 金堂預に補任（「性専律師」の關分として） 富河之高橋の供養で呪願 他界 貞和五年正月十一日の所々講の請定案で「西大門」を担当 晦講の新頭の一人 建武二年の御霊会で田楽・猿楽に禄物を与えた年会五師</p>	<p>(ハ) 『請』建武四・八・廿四 建武五・十二・廿七 暦応二・三・廿六 貞和二・正・廿一 貞和三・十一・六 文和元・正・十一 『寺』正・十一 『寺』正・晦 『寺』八・廿三</p>
⑪浄宗房定弁	<p>住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「キラヒ」 聖霊院での雨悦の延年で西飯屋猿楽衆 祈雨のための龍池社への参龍衆 再び祈雨のための龍池社への参龍衆 別当福智院憲真の時代の三教院々主 三教院主相伝の記事（中院定朝↓彼甥浄宗房定弁↓其甥宗泉房快専） 元弘二年の三教院庇妻葺替の記事の中で院主として 正和年中に「中門ノヲリノ会」を始行</p>	<p>(イ) (ロ) 『請』元応三・八・八 『請』建武四・七・晦 康永三・十一・廿三 文和四・七月申 延文元・十・廿二 『寺』正・一</p>
⑫定春房賢興	<p>住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「大衆（作兒）」 西室所持の多摩曼荼羅紛失の件で「預置人ハ賢与定春房」として</p>	<p>(イ) 延慶四・二・五</p>
⑬定松房	<p>住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「神主」 龍田の西口で中道院の下人弥三郎を刃傷、大衆から罪科されるが「一門」の口入によつてほどなく免除 強盗事件に関する龍田での大落書で「定松房廿余通」の落書 廻廊に懸けた行者講衆の的を顕禪房が切り落として逆に法喜房に刃傷された事件で、衆</p>	<p>(イ) 延慶三・六・六 延慶三・七・十七 正和四・二・廿九</p>

	分は法喜房の親父の住屋を焼失したが、この時「定松房」が「エイクルヒニ」「上総公」を殺害	
⑭定尊	聖霊院での雨悦の延年で東飯屋猿楽衆・他の記事なし	(ロ)
⑮聖泉房	住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「師子」・他の記事なし	(イ)
⑯泉識房	住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「仕丁」・他の記事なし	(イ)
⑰専順房慶祐	住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で馬の「口取」 祈雨願課の相撲に関する評定衆 聖霊院での雨悦の延年で供奉衆 天満社造替に関し「慶祐自願也、生年卅二歳」、その他井垣鳥居・拝殿も「慶祐自願」とある 五師補任、ただし年会は次年勤仕するようにと三輩評定 下臈分による鵜庄雜掌罪科の件で、年会として調整し事態を收拾 賢定房得業實恵の他界に伴い、供僧關分に慶祐補任 鵜庄浮免代所之年貢に関する堂家の老衆・若衆の相論を收拾 当年の年会五師 天満社講問の施主 南朝から権律師に補任「生年六十二歳」 聖霊院妻庇葺替に関する記事の中に「院主慶祐大法師」として 聖霊會の三鼓の新造に際して「筒桐木」を寄進 北朝から法隆寺への僧綱三口未來永代寄進に伴い、権律師に補任 南北両朝それぞれから権大僧都に補任 聖霊會の行事装束の損料に関し、時の梵音衆沙汰人善宗房に質問 金堂後戸・三殊勝地藏前の毎月廿四日の地藏供養法の施主に関し、慶祐の親を「慶玄法印」、祖父を「信算春蓮房」とする 金泥法華經一部・開結二經を寄進	(イ) (イ) 【請】元応三・九・十六 (ハ) 元亨四・四・十 建武五末・暦応二・正・廿 暦応二・十二・晦 暦応四・八・廿六 康永二・十二月中 康永三・正・廿 観応元・七・一 文和三・五・九 延文二・二・七 延文二・六月中 延文二・十一・廿二 延文六・二・十八 貞治二年中 貞治二・三月中 貞治三・二・十五

	<p>正和年中に「中門ノヲリノ会」を始行 聖霊院御味曾水事の記事の中で「慶祐院主時代康永二年」とある 金堂御行の節事、(慶祐の沙汰分について記述) 西円堂御行の事、(観応二年導師を辞退し巡導師重玄得業に譲与) 貞和五年正月十一日の所々講の請定案で「東大門」を担当 晦講の新頭の一人 東院夏番始行の事の記事の中で「養母尼蓮如房」とある 東院孟蘭盆講の事の記事の中で「極樂六字讀 延文四年〔己亥〕五月十八日以上宮王院 正本書寫畢、権律師慶祐〔生年、六十七才〕とある</p>	<p>〔寺〕正・一 〔寺〕正・二 〔寺〕正・七 〔寺〕正・八 〔寺〕正・十一 〔寺〕正・晦 〔寺〕七・一(一十四) 〔寺〕七・十五</p>
⑬専定房	<p>住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で馬の「口取」 祈雨のための龍池社への参龍衆 聖霊院での雨悦の延年で供奉衆</p>	<p>(イ) 〔請〕元応三・八・八 (ハ)</p>
⑭善恵	<p>聖霊院での雨悦の延年で西飯屋猿樂衆 三教院世親講始行の施主 和泉国高石新左衛門・播磨国八木四郎左衛門による鴈庄押領事件が発生した際、雑掌として庄家に下向 五師年会所の評定に「権律師善恵」と署判 講衆の評定に際し五師と並んで「一臈法印善恵」と署判 貞和五年正月十一日の所々講の請定案で「聖霊院」を担当 聖霊院御影供始行の施主</p>	<p>(ロ) 貞和三・五・五 貞和二・十一・廿七 〔伍〕延文四・六・十八 〔伍〕貞治三・十二・十八 〔寺〕正・十一 〔寺〕曆応三・三・廿一</p>
⑮奨頭房弁盛	<p>住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「師子鼓」 実性院堂での如法經の供奉衆(同日、惣社前で延年・風流あり) 翌年の「三蔵会堅義者交名」の一人として(弁盛〔奨頭房、年卅四戒十七〕) 聖霊院での雨悦の延年で供奉衆 聖霊院での雨悦の最勝十講で転読衆</p>	<p>(イ) 文保三・三・廿一 〔拜〕元応元・十二・廿六 (ハ) 〔請〕建武四・八・廿四</p>

	繪殿預に関する弁盛・範尊の相論、舍利堂で「採（探カ）取」（結果は範尊が「取当」） 富河之高橋の供養で「散花」 五師年会所の評定に「権律師弁盛」と署判 貞和五年正月十一日の所々講の請定案で「南大門」を担当 晦講の新頭の一人	康永三・二・九 貞和三・十一・六 「伍」延文四・六・十八 「寺」正・十一 「寺」正・晦
②①道教房	住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「キヲヒ」・他の記事なし	（イ）
②②忍盛	聖靈院での雨悦の延年で西飯屋猿樂衆・他の記事なし	（ロ）
②③範尊	聖靈院での雨悦の延年で西飯屋猿樂衆として「開口」 聖靈院での雨悦の最勝十講で講師 「五師」の一人として 年会五師交替の儀の先例として「実禪」から「範尊」への例 繪殿預に関する弁盛・範尊の相論、舍利堂で「採（探カ）取」（結果は範尊が「取当」） 他界（享年五十八歳） 頭禪房性憲の他界に伴う繪殿預關分事に関する先例の一つとして 正和年中に「中門ノヲリノ会」を始行	（ロ） 「請」建武四・八・廿四 建武五・十一・廿七 康永三・正・廿 康永三・二・九 貞和二・正・八 文和二・五・廿七 「寺」正・一
②④良見房	住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「神官」・他の記事なし	（イ）
②⑤了禪房	住吉ノ草木會之式による下臈分弓風流で「神官」・他の記事なし	（イ）

※ 出典欄の記号は、「請」が「請雨舊記」、「寺」が「寺要日記」、「別」が「法隆寺別当次第」、「拜」が「寺務拝堂舊記」、「伍」が「法隆寺衙伍師年会所舊記」のことであり、記号のないものは「嘉元記」である。

以上が、鎌倉末・南北朝期における法隆寺の延年僧の活動の概要である。尤も、さほど重要と認められなかったものは除外してある上、採り落としたものもあるかも知れない。その意味でまさに概要である。しかし、当該時期の法隆寺の延年僧の全体像を幾分なりとも明らかにできたのではないかと考える。そこで、以下、この表中から読み取れる特徴につい

て若干述べてみたい。

先ず、第一に注目すべきは記事の量的な格差である。量の多い僧侶は、②・③・⑦・⑧・⑨・⑩・⑪・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱・㉑の十一名であり、いずれも五件以上の記事を残している。このうち、(イ)・(ハ)の二つ以上の延年に出演しているのは②・③・⑧・⑨・⑩・⑪・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱の九名である。逆に量の少ないのは、①・④・⑤・⑫・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱・㉑の十一名であり、記事の数はいずれも二件以下である。とくに、⑤・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱・㉑の八名は(イ)・(ロ)のいずれか一つの延年にしか出演しておらず、その他の活動を示す記事も見当たらない。そして、両者の中間に当たるのが⑥・⑬・⑭の三名である。しかし、⑥・⑬は(イ)・(ハ)の二つの延年に出演しており、延年への関わりの深さという点では前者に分類して差し支えない。そこで、この二名を前者に加えると、記事の多い僧侶十三名のうち二つ以上の延年に関与していたのは十一名ということになる。こうした集計結果から、右の表中の記事の量はその僧侶の延年との関わりの深さと関連があるものと考えられる。つまり、すべての僧侶が必ず延年に関わらなくてはならなかったというのではなく、主たる担い手となる僧侶がいたということである。そして、彼等が芸に堪能な僧侶だったであろうということとは容易に想像のつくところである。

しかし、第二に注目すべきは、延年と関わりが深く主たる担い手であったとされるそうした僧侶達の場合、延年へ関与しなくなつてから以降の記事に、大衆の代表であり寺僧集団運営の中核となる「五師」(③・⑩・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱)や、「金堂預」(②・⑩)・「舍利預」(⑨)・「絵殿預」(⑦・㉑)といった寺内の要職への就任記事、またその役職における活動の記録が多々見られるようになるということである。さらには、僧綱に達したことが確認できる僧侶も五名(②・⑦・⑬・⑭・⑮)いる。逆に言うならば、その故に記事の量が多くなつたということなのであろうが、しかし、これはまた、彼等が芸に堪能であったとは言つても、それを自らの「道」とみなして日夜芸の錬磨に専心し、延年芸の披露を本務とするような僧侶、所謂「遊僧」Ⅱ「道者」では決してなかったということを意味している。確かに十五・六世紀の遊僧、と

くに多武峰の遊僧には僧綱位を得ている者が多い。しかし、僧綱位を持つていうことだけで、右に見た法隆寺の僧侶達をこれらの遊僧と同一視することはできない。というのは、法隆寺僧の場合、臈次を積んで昇進し、また大衆を統率して寺院を運営する本務を着実にこなした功勞によつて僧綱位を与えられていたと考えられるからである。ちなみに、彼等が延年に出演しているのは、前稿で明らかにしたように、下臈・中臈の頃であり、上臈に昇進する頃には延年の諸役・表舞台には関わりなくなるのが常であった。これも十五・六世紀の遊僧とは異なる点であり、彼等は延年芸に関してはあくまで「素人」であつたと言わなくてはならないであろう。以上、表から読み取れる二つの特徴によつて、当該時期の法隆寺延年僧の性格を明らかにすることができたと考える。

ただし、ここで一つ注意しておかなくてはならないことがある。それは、記事の量が群を抜いて多く、記述も詳細な僧侶「専順房慶祐」についてである。彼は記事の内容やその記し方から、『嘉元記』・『寺要日記』等の記主の一人とみなされている人物である。右の表はこの二つの記録の記事を中心に作成したものであるから、記事の量的な格差は、各僧侶の延年との関わりの深さによるばかりでなく、「慶祐」との関係の親疎、もしくは「慶祐」の属した寺僧集団との関係の親疎に影響されている可能性も十分にある。とすれば、「慶祐」がどのような僧侶であつたのか、また「慶祐」的な僧侶とはどのような性格の存在であつたのか明らかにすることも重要な課題となつてくるであろう。そしてこの課題を解決するためには、「慶祐」の記事をより多角的に分析することは勿論、『嘉元記』・『寺要日記』の記録としての性格を全面的に検討することが必要である。しかし、これが容易に行える作業でないこと、また軽々に扱うべき問題でもないことは明らかである。そこで、この問題に関しては別の機会にあらためて論ずることとし、本稿では表中のもう一つの注目すべき点について指摘してみたい。

それは、延年僧と在地との関係・支配下荘園との関係を伺うことのできる記事がいくつか見られるという点である。これは、今までに述べてきたような法隆寺寺内の問題ではなく、延年僧をとりまく寺外の世界を知る手懸かりとなるもので

あり、延年僧の歴史的な性格をより総合的に明らかにする上で重要な意味を持つものであると言えよう。そこで、次章においてこの点を検討することにした。

二 法隆寺の延年僧と在地との関係

前章の表において、何らかの形で在地との関係をうかがうことのできる僧侶は③・⑧・⑨・⑩・⑬・⑭・⑮の七名である。このうち、法隆寺領播磨国鶴庄に関する記事の中に名前が出てくるのが③・⑨・⑭・⑮の四名であり、龍田や東西両郷など、法隆寺周辺の在地勢力との関わりの中で名前が出てくるのが⑧・⑨・⑩・⑬の四名である。⑨の「淨舜房長盛」はその双方に関与している。ただ、前者の場合、③の「教賢房有玄」と⑨の「善恵」が寺家の「雑掌」として、⑨の「長盛」が鶴庄寄進状の「請取使」の一人として、⑭の「専順房慶祐」が年貢や雑掌に関する紛争を調整する「年会五師」として、つまりいずれも莊園を経営する寺家側の役人として活動していることがわかるだけであり、在地との関係はいまひとつ明瞭に捉えることができない。これに対し後者では、法隆寺周辺の問題であるだけに、ある程度具体的に在地勢力との関係を追跡することができる。中でも⑬の「定松房」は、表に挙げた延慶三年（一一三〇）の二つの事件において重要な役割を果たしており、特筆すべき人物である。そこで以下、この「定松房」を素材として延年僧と在地との関係について考察してみたい。

さて延慶三年という点、表にもあるように四月五日、(イ)の延年すなわち「住吉ノ草木會之式」に基づく「弓風流」が下臈分によって行われた年である。この延年については前稿でも論じたので、史料を挙げて詳しく説明することはしないが、定松房の延年僧としての活動・位置付けなどを確認しておくために、ひと通り延年の次第と配役について触れておきたい。まず、作仕丁が二人(③・⑭)、作中綱が一人(⑨)、作大衆が三人(⑧・⑩・⑫)登場し、大衆のうちの一人顯

了房(⑧)が開口を行う。次いで王ノ舞(②)が舞われ、続いて鼓(⑳)にあわせて師子舞(頭は⑮、尾は⑦が担当)が舞われる。次いで「弓風流」の部分に移ったと思われる、馬の口取の二人(⑰・⑱)を従えた乗馬の巫(⑥)が登場し、続いてキラヒが二人(⑪・⑫)、兒が四人出てくる。そして、神官(⑤・④・③)を従えて神主役の定松房(⑬)が登場し、最後に兒による舞楽「抜頭」が舞われ延年会全体が終了するといった具合である。出演した下臈分は総勢で十九名にのほり、定松房はの中で「弓風流」の「神主」役をつとめた。この「弓風流」の「弓」にどのような意味があったか定かではない。ただ現在、神事芸能として残されている「弓神楽」⁽⁶⁾などでは、神座の前に祭った弓の弦を神主が祭文を唱えながら打竹で叩いたり、矢をつがえて四方に放ったりする所作が見られる。神事の中でこれが重要な意味を持つ所作であることから、住吉社の儀式を模したと想像されるこの風流においても、「神主」というのは相当に重要な役であったか、少なくとも格式の高い役だったと思われる。馬の口取やキラヒ・神官などの端役とはかなり違った扱いである。要するに、この日の延年における定松房は、言わばメインイベントの主役に近い役を演ずる延年僧だったわけである。これは延年僧の中、或いは下臈分の中における彼の位置付けを示す一つの材料となるはずである。ところが、約二カ月後の六月六日、彼はある刃傷事件の記事の中に加害者として登場してくる。その記事を以下に掲げてみよう。

同年^{庚戌}六月六日酉時計、於^三龍田西口、賢定房得業・定松房^{兄弟}_{二人}シテ、中道院下人弥三郎ヲ切打、散々ニシ給畢、刃傷ノ科、任^三先例^一有^ニ其沙汰^一、八日蜂起在^レ之、定松房出仕シテ義ヲ被^レ申之間、不^ニ成立^一_{如^レ是スル事、實光院ニ武者ヲ入置之間、}衆徒武具大衆ニテ、可^レ有^ニ罪科^一トテ、一黨ヲ奉^レ語之處、皆以領狀、爰近邊之一門中ニ入テ口入、所詮^ニ親^一懸事ヲ有^ニハキ御免^一ヨシ被^レ申間、同廿一日、白大衆ニテ即^ニ躰^一ハカリヲ罪科了、其後一門又有^ニ口入^一、同七月十三日戌時計免了、酒肴良識、坊在^レ之、精進營^レ之。

先ず、事件の経過を追ってみる。六月六日夜、酉の時ばかりに、龍田の西口において賢定房得業と定松房の兄弟が、中道院の下人である弥三郎を刃傷し、散々に暴行するという事件が発生した。八日、衆徒は先例に従って刃傷の罪科に処す

べく蜂起を行ったが、その場に定松房が出仕して自ら申し開きを行ったので、蜂起は成立しなかった。このようなことが二度・三度と繰り返された。そうこうしているうちに、定松房側が寶光院に武者を入れ置き抵抗の構えを示したので、衆徒側も武装して、罪科あるべしと「一黨」に協力を要請したところ、「一黨」の面々は皆領状した。両者の関係がこのように緊迫したところで、「近邊之一門」が中に入って調整し、「二親ニ懸事」すなわち縁座による親族への罪科の適用は免除するということで決着した。そこで廿一日、衆徒側は武装せずに定松房・賢定房の「即解」、つまり本人の身柄に対してのみ罪科を処した。しかし、その後また「一門」の口入があつて、七月十三日にはその罪科も免除されることになった。およそ以上の如くである。

では次に、事件経過に沿っていくつか注目すべき点を指摘してみよう。第一点は、定松房が衆徒の蜂起を「不成立」に追い込んだことである。「蜂起⁽⁷⁾」とは、「一味同心」・「一味神水」という「一揆」の作法によって作り出される寺院社会特有の集会であり、「強訴」など寺院全体にかかわる重大問題の決定の際や、犯罪者の追捕・罪科・免除など検断を執行する際に行われた。この事件も、通常であれば定松房等を「刃傷ノ科」に処して終わる検断事件であるから、衆徒が何の迷いもなく蜂起を行おうとしたのは当然である。ところが、その蜂起が成り立たなかったというのである。これは定松房の異議申し立てに同調する衆徒が現れ、「一味同心」の状態を作ることができなかったためであると考えられる。先に、定松房は延年僧の中や下臈分の中で高い位置付けを持っていたのではないかと推測したが、ここから中臈以上の僧侶を含む衆徒に対しても強い影響力を及ぼす人脈と政治力を持っていたことがわかる。

第二点は、賢定房・定松房兄弟が即時に「武者」を動員することができたという点である。「武者」は在地武士のことを指すと考えられ、この兄弟と在地武士との間にはかなり親密な関係があつたのではないかと思われる。そして、恐らくこれが、第一点に見た定松房の人脈・政治力の背景となつていたのであろう。また、兄弟が武力を集結させたのは「寶光院」であつた。暦応四年（一三四一）八月廿六日条に賢定房の他界記事があるが、そこには「實惠賢定房得業他界、寶光院」と記

されており、寶光院は賢定房の本拠となる子院であったことがわかる。彼等兄弟が在地武士達をここに集めたのもそのためであろう。

第三点は、賢定房・定松房兄弟に対抗して武装した衆徒が、「一黨」に協力を要請したことである。衆徒が武装するのは中世寺院において別段珍しいことではない。しかし、寺外の勢力、それも衆徒と繋がりのある在地武士らしき「一黨」に対し協力を求めたという点は重要である。というのも、これが他の中世寺院と同様、法隆寺の寺僧集団が寺外の秩序・勢力と無関係には成り立ち得なかったことを意味しているとともに、賢定房・定松房兄弟側の在地武士の力が侮り難いものであったことを証しているからである。

第四点は、「近邊之一門」が調整に入ってようやく事態が收拾したこと、またその收拾案の要点が「二親ニ懸事」の「御免」すなわち縁座適用の免除にあったということ、さらに「即躰」の罪科の方も「一門」の口入によって三週間で免除されたこと等々、「近邊之一門」・「一門」に関する部分である。彼等が賢定房・定松房兄弟の「一門」であることは、收拾案の内容や「即躰」の罪科がほとんど実効のないものになったことなどから明らかである。そして、事件の決着がこのような形でなされたということは、この「一門」の力が衆徒側の「一黨」の力をしのぐものであったということを意味していると考えるべきであろう。

以上、延慶三年六月六日に起きた賢定房・定松房兄弟による刃傷事件を通して、法隆寺の寺僧集団が在地の勢力・在地の秩序と無関係ではいられなかったこと、中でも「下臈分弓風流」に出演した延年僧「定松房」の「一門」が、法隆寺に大きな影響力を及ぼすかなり有力な在地武士であったことがわかった。では、その定松房の「一門」とは、具体的にはどの武士団を指していたのであろうか。「近邊之」というのであるから、法隆寺周辺の武士団であることは間違いない。この点を念頭に置きつつ、定松房が関わったもう一つの延慶三年の事件について考察してみたい。

事件は七月五日の夜に起こった。法隆寺の子院の一つ蓮城院に強盗が押し入ったのである。法隆寺は直ちに犯人の搜索

に着手したが、解決のメドが立たなかったため、結局「解文」を放つという手続きをとることになった。これは懸賞金をかけて犯人を捜索する一種の公開捜査である。さらに、東西の両法隆寺郷・龍田・五百井以下、近郷の十七ヶ所に牒送して郷民を召集し、同十七日龍田社において合同の「大落書」を行った。「落書」は「落書起請」⁹とも呼ばれ、神仙に対して誓約をさせた上、自分の知っている犯人の名前や、風聞によって知り得た情報を書かせて匿名で投票させるという、中世社会で広く行われた神判の一種である。落書の開き役として、法隆寺から「堯禪房・禪覺房・賢永房・賢禪房・淨舜房・淨泉房・顯了房」の七人が出仕した。このうち「淨舜房・淨泉房・顯了房」が延年僧である。落書の総数は六百余通にのほり、「實證」として名前を記されたものが十通以上、もしくは「普聞（風聞）」によるものが六十通に達した場合、犯人と断定する旨定め、二日間かけて開いた。ところが、その結果、法隆寺にとって極めて具合の悪い事態が起きてしまった。次に、これにつづく史料を掲げてみよう。

而定松房廿余通・舜識房十九通、此二人令_レ治定之間、十七ヶ所當寺ニ發向、於_ニ寺中事_ニ者、惣寺可_レ致_ニ其沙汰_一、被_ニ相待_一候へト問答スル之程ニ、大勢□池ノ邊ニ相待、爰兩郷舜識房坊へ相向之處、因幡法橋・賢定房得業、率_ニ人勢_一馳向テ追返了、日既暮之間、先皆々退散畢、今兩人ハ不實之鉢也、為_ニ兩人之沙汰_一、實證之盜人ヲ可_ニ搦出_一云々、次日有_ニ集會_一、此人々之出仕止了

すなわち、法隆寺僧たる「定松房」が廿余通に、「舜識房」が十九通に名前を記されてしまったのである。寺僧が犯人と断定されたことにより、十七ヶ所の郷民はいきり立って寺に押し寄せて来た。寺側は、寺中の問題については惣寺として処置する旨返答し何とか説得しようとしたが、納得の行かない東西兩郷の郷民は舜識房の坊舎へと向かった。これを見た「因幡法橋」と「賢定房得業」は人勢を率いて駆けつけ、郷民達を追い返すという騒ぎになった。それでも、日が暮れたので、その日は皆退散した。しかし、この二人は「不實之鉢」であり、彼等自身の手で真犯人を捉えるとのことであった。次の日、法隆寺で集會が開かれ、彼等は出仕停止の処分を受けた。記事はその後、十二月になって、二人が「初石八郎」

という男を捉えて盗品とともに寺に突き出し、これを「實證之跡」と認定した寺が彼等に懸賞金廿貫文を出したという結末を記している。「初石八郎」は法隆寺の北辺にある極楽寺で頸を切られ、頸は三日間さらされたという。以上が、事件経過の概要である。

では、今回の事件の注目すべき点を指摘してみたい。先ず、法隆寺の検断手続きとして「解文」・「落書起請」があったという点、またその対象地域が寺辺の「十七ヶ所」であったという点、これらがいずれも注目し得る問題であることは疑いない。ただ、先の刃傷事件の中で提出した問題との関連は薄いと考えられるので、ここではあえて言及しないことにする。とすると、第一に注目すべきは、六百余通のうちの廿余通と十九通とは言え、定松房・舜識房の二人が郷民達から強盗の犯人と名指しされた点であろう。尤も、後に真犯人と思しき人物を二人の手で搦め進めているのでから、この件に関しては無実の罪であったのかも知れない。しかし、定松房は六月六日にも刃傷事件を起こしており、その行状には実際に余るものがあつたのではないだろうか。無論、こうした行状の悪さが個人の資質に基づくものであることは言うまでもない。しかし、彼を法隆寺に送り込んだ在地勢力の強力な後押しや保護があつたことも否定できないであろう。要するに、定松房等は在地の有力者を「一門」に持ち、その権勢を利用してはばからない、言わば「悪僧」であつたということである。

しかし、延年との関係で言えば、定松房のような「悪僧」ですら延年に出演することができたということになる。これは、前稿及び前章で明らかにしたように、当時の法隆寺の延年が、いまだ「遊僧」のような遊芸専門の僧侶を輩出する段階ではなく、寺による組織化はなされつつあるものの、僧侶の素人芸の域を出ない過渡的な段階にあつたということを物語るとともに、在地の勢力が延年僧の人選や延年の執行に何らかの影響を与えていたことをうかがわせるものである。

第二に注目すべきは、寺側の制止にもかかわらず実力行使に出ようとした郷民達に対し、因幡法橋と賢定房が人勢を率いて駆けつけ郷民達を追い返したという点である。賢定房は、六月六日の刃傷事件で見たように定松房の兄であるから、

定松房側に立つて行動するのは当然であろう。では、因幡法橋とはどのような人物だったのであるうか。

『嘉元記』では、因幡法橋に関して他に二つの記事を載せている。延慶三年五月三日条と同四年六月四日・六日条である。前者は、龍田の市で「丹後圓行入道」という彼の所従が刃傷され、これに怒った因幡法橋が「上下十四五人」を率い、夜陰に乗じて龍田に攻め寄せた事件である。しかし、龍田側も襲撃を予想していたのか、因幡法橋達は逆に「散々ニ射ラレテ、拜殿へ引龍」り、寺の東西の「早金」が打ち鳴らされて「近邊皆馳集」まるといふ騒動になってしまった。彼等が拜殿から引き出されたのは暁方になってからであった。この事件も、武力に頼る因幡法橋の「悪僧」ぶり、それに振り回される法隆寺の姿が如実に示されていて面白いが、さらに興味深いのは事件後の処置に関する以下の記述である。

其後依_ニ龍田之訴訟、因幡法橋・舜頭房五師兩人、院家一乘院ヨリ有_ニ其沙汰、早鐘ヲハ寺無_ニ存知之由申開了、兩人ヲハ別當ヨリ見對ノ罪科了、寺勘也、小泉ヲハ院家ヨリ罪科云々、程不_レ久シテ免了

すなわち、龍田側が大和守護の権能を持つ興福寺に訴訟を提起し、時の興福寺別当である「院家一乘院」良信大僧正⁽¹⁰⁾から因幡法橋・舜頭房の二人が罪科されたのである。この時舜頭房は、大衆を代表し寺僧集団を運営する五師の地位にあり、こうした僧侶が因幡法橋に加担していたということは、法隆寺内にくい込んだ彼の強力な人脈・政治力をうかがわせる。しかし、法隆寺の惣寺にとって、これが必ずしも好ましい状態であったとは思われない。というのも、早鐘を槌いた問題では「寺無_ニ存知之由申開」きをして、惣寺が関わっていないことを主張し、法隆寺別当たる興福寺西南院の実⁽¹¹⁾聡による「見對ノ罪科」を受けて兩人を「寺勘」に処しているからである。因幡法橋等を支持するグループにとっても、これは興福寺との上下関係・力関係から言って、当面は受け入れざるを得ない措置であったに違いないが、それにしても「寺勘」というのは穏やかではない。やはり、寺内に因幡法橋等を批判する動きがあったことは確かであろう。

そして、最も注目すべきは、これに続く「小泉ヲハ院家ヨリ罪科」という記述である。小泉氏は興福寺の大乗院門跡方に属する衆徒で、法隆寺の北東辺一帯を地盤とする有力な在地武士団⁽¹²⁾である。なぜ突然ここに小泉の名前が出てきたので

あろうか。それは、因幡法橋等との関係を抜きにしては考えられない。つまり、因幡法橋等の「一門」であり、彼等を法隆寺に送り込んでいた在地武士団は小泉氏であったということである。

このことは、延慶四年（一二三二）六月四日に起きたもう一つの事件によっても確認できる。これは、因幡法橋とその「舎弟淨圓房」の下人が、「小泉之北浦ニテ」「田中之殿原」に殺害された事件である。小泉側は報復のため直ちに田中へ攻め寄せ、六日、再度攻撃をしかけようとしたところで仲裁が入り、田中側が引き退いて決着した。ここに出てくる因幡法橋の「舎弟淨圓房」は、元弘二年（一二三三）七月に起きた立野と窪田との合戦に関する記事の中で「小泉淨圓房」と記されている人物である。

これらのことから、因幡法橋・淨圓房の「一門」が小泉氏であったことは明らかである。要するに、因幡法橋等が日常的に武力を行使し、法隆寺内ではほとんどわがもの顔に振る舞っていたのも、法隆寺周辺の最大の武士団である小泉氏を後ろ盾としていたからに他ならない。先に見た五月三日の龍田襲撃の件で、彼等が「寺勘」に処せられながら「程不_レ久シテ免」ぜられた背後にも、小泉「一門」による政治的圧力という事情があったのではないだろうか。こうしたことが法隆寺の惣寺にとって好ましいことではないのは勿論であるが、現実問題としては受け入れざるを得ないものであったと思われる。

ところで、因幡法橋と小泉氏との関係を追ってきたのは、そもそも賢定房が弟の定松房等を守るために彼と行動を共にしていたからであった。また、賢定房・定松房兄弟の行動パターンが他の寺僧とは異なり、むしろ因幡法橋の行動に通じる部分が多いという点も、これまでに挙げた諸事例によって確かめられたと思う。これらのことから、賢定房・定松房兄弟の「一門」、最初に見た延慶三年六月の刃傷事件において問題になった「近邊之一門」も小泉氏であったと言えることができるであろう。

以上、長々と論証に紙幅を費やしてきたが、これで延年僧の一人定松房と在地との関係を明らかにすることができた

考える。すなわち、定松房は在地の有力武士団小泉氏から法隆寺に入った、或いは送り込まれた僧侶で、彼が惣寺の意図から半ば独立しつつ自己の主張を押し通し、大胆に行動していたのも、小泉一門の後ろ盾を得ていたからであると言える。そして、それは恐らく、延年の執行についても同様であったろう。つまり、先に見たように、(イ)の延年の「弓風流」において「神主」という重要な役柄が定松房に割り当てられたのも、彼の延年の技量が優れていたからではなく、小泉一門の後押しによるものであったと考えられる。このように延年の執行・その配役の決定などには、多かれ少なかれ、延年僧の出身母体の勢力が影響を及ぼしていたのではないだろうか。

尤も、定松房は(イ)の延年にしか出演しておらず、当該時期の典型的・代表的な延年僧とはとても言えない。延慶三年七月の「大落書」で「開衆」として出仕した「淨舜房・淨泉房・顯了房」の三人などとは比ぶべくもない。しかしこの三人の場合、残念ながら在地との関係をはっきりと把握できるような史料が見当たらないのである。また、定松房が「悪僧」であったことなどから、彼の事例を一種の特例に過ぎないとみなす見方もできるかも知れない。しかし、在地との関係を追跡できる延年僧が他にいない以上、彼の事例をもとにして考えるしか手立てはないと思われる。とすれば、「遊僧」による延年の執行という段階に達していないこの時期の法隆寺においては、定松房の例は極端な例であるとしても、延年芸の技量だけでなく、在地勢力との関係が延年僧の活動に少なからぬ影響を与えていたということはやはり否定できないと言えよう。

おわりに

以上、鎌倉末・南北朝期の法隆寺と延年について、前稿に引き続き延年僧に着目して考察を行った。その結果、当該時期の法隆寺延年僧の全体像、また延年僧を取り巻く環境などがある程度明らかにすることができたと思う。ただ、執筆

を終えてみると、考察に必要な史料を見落としていたり、史料解釈や論証が不十分であったり、不備な点が色々と見られるのではないかと気にかかるのはいつもの通りである。是非、大方の御批判・御教示を賜りたい。

また、延年という主題に関して言えば、まだまだ残された課題は多い。その一つとして、延年の芸能が行われた場合、空間の問題を挙げることができる。法隆寺では、境内の諸院家の前庭、たとえば聖霊院や寶光院の前などで行われる場合、境内を出て、たとえば寺の北辺に位置する龍池社の蔵王堂の前などで行われる場合などがある。これらの場所、空間にはいかなる役割が与えられていたのか。そこで行われる延年会の目的、延年芸能の持つ意味とはどのような繋がりがあったのか。こういった問題である。また、かなり詳細な史料を残している東大寺や興福寺など南都の延年や、戦国期のものではあるが延年の詳しい台本を残す多武峰の延年との比較検討なども行わなくてはならない作業の一つであろう。さらに、風流・連詞・開口・当弁（答弁）など延年の諸芸能と、猿楽や田楽、また能・狂言との交流や影響関係といった、芸能史上における極めて大きな問題が残されていることは言うまでもない。一方、本稿でも指摘したように、法隆寺関係の根本史料とされている『嘉元記』・『寺要日記』等についても、記主は一体誰であったのか、記事はどのような基準でどのような資料をもとに選ばれたのかなど、その史料としての基本的な性格を再度検討する必要があると思われる。

以上、ざっと並べてみただけでも、残された課題はこんなにも多い。また、数の多さもさることながら、一つ一つの課題の持つ内容的な広がり・深さを考えるとただただ当惑するばかりである。しかし、当惑してばかりはいられない。可能なものから、一つ一つ地道にとりかかっていくことにしたい。

注

- (1) 『多武峰延年詞章』に関しては志田延義氏編『続日本歌謡集成』第二卷中世編（東京堂出版、一九六一年）、本田安次氏編『日本の民俗芸能』（木耳社、一九六九年）に史料の翻刻と詳しい解説がある。その他の延年関係の史料は、芸能史研究会編『日本

庶民文化史料集成』第二卷（三一書房、一九七四年）に詳しい。

- (2) 能瀬朝次氏『能楽源流考』（岩波書店、一九三八年）、成瀬二三氏『能楽の研究』（私家版、一九三八年）、林屋辰三郎氏『中世芸能史の研究』（岩波書店、一九六〇）、植木行宣氏『延年芸能の展開—先行芸能からの継承と創造—』（『風俗』二一四）、同氏『延年風流とその形成』（『藝能史研究』一一、一九六五年）、同氏『「能」形成前の猿楽』（『藝能史研究』二二、一九六八年）、北川忠彦氏『観阿弥の藝流』（三弥井書店、一九七八年）、藝能史研究会編『日本芸能史』第二・三卷（法政大学出版局、一九八二・三年）等

- (3) 同氏『南都寺院における衆徒の延年結構—僉議の芸能化をめぐる—』（『藝能史研究』一〇三、一九八八年）、『延年発生の諸相—示威・闘争・介入、異形の芸能—』（『芸能』一九八九年一月号）、『賓客来臨・任官儀礼と延年—延年発生についての一考察—』（『儀礼文化』一四、一九九〇年）、『延年風流—華麗なる越境—』（『音と映像と文字による（大系）日本歴史と芸能』第九巻、平凡社、一九九一年）、『延年風流のドラマツルギー（上・下）』（『月刊百科』三四九・三五〇、一九九一年）、『室町期興福寺の延年』（『和光大学人文学部紀要』二八、一九九三年）等

- (4) 拙稿『「嘉元記」に見える延年』（『遙かなる中世』一六、一九九七年）

- (5) 『嘉元記』・『寺要日記』・『寺務御拝堂注文』はそれぞれ『影印本 法隆寺史料集成』五、『同』六・七、『同』二（ワコー美術出版株式会社、一九八四・五年）を、『請雨舊記』・『寺務拝堂舊記（原題 寺務御拝堂事）』・『法隆寺衛伍師年会所舊記』は東京大学史料編纂所所蔵の写真帳『法隆寺記録』を、『法隆寺別当次第』は『続群書類従』四下を用いた。本文中、とくに断りなく史料を挙げている場合は『嘉元記』からの引用である。また、法隆寺及び法隆寺の史料に関する研究としては、林屋辰三郎氏『南北朝時代の法隆寺と東西両郷』（同氏『中世文化の基調』東京大学出版会、一九五三年、ただし初出は一九四六年）、太田順三氏『室町時代の法隆寺寺院組織の一樣相』（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』一五、一九六九年）、間中定泉氏・高田良信氏『法隆寺』（学生社、一九七四年）、高田良信氏『法隆寺子院の研究』（同朋社出版、一九八一年）、林幹彌氏『太子信仰の研究』（吉川弘文館、一九八〇年）、勝又壽久氏『「嘉元記」康永三年閏二月十五日条をめぐる』（『内乱史研究会会報』七、一九八七年）、同氏『「嘉元記」索引（人名編）』（『内乱史研究会会報』八、一九八八年）、細川涼一氏『戦国時代の法隆寺と門前検断』（『中世寺院史研究会編「中世寺院史の研究」上、法蔵館、一九八八年）、同氏『中世の法隆寺と寺辺民衆』（同氏『中世の身分制と非人』、日本エディタースクール出版部、一九九四年、ただし初出は一九八三年）、山岸常人氏『南北朝期法隆寺の僧団と法会』（佐藤道子氏編『中世寺院と法会』、法蔵館、一九九四年）等がある。本稿を執筆するに際して参考にさせて頂いた。

- (6) 広島県甲奴郡上下町の『弓神楽』など、備後地方の各地に伝承されている神事芸能

(7) 「蜂起」に関しては、勝俣鎮夫氏「二揆」(岩波書店、一九八二年)、安田次郎氏「興福寺『衆中』について―その呪術的側面―」(『名古屋学院大学論集』二〇―二、一九八四年)、久野修義氏「中世寺院の僧侶集団」(朝尾直弘氏・網野善彦氏・山口啓二氏・吉田孝氏編『日本の社会史』六、岩波書店、一九八八年)、藤原良章氏「法螺を吹く」(『ことばの文化史』〔中世三〕、平凡社、一九八九年)、拙稿「蜂起」小考」(石井進氏編『都と鄙の中世史』、吉川弘文館、一九九二年)等の研究がある。また、筆者は右に挙げた拙稿において、相対立する僧侶集団の間ではしばしば相手方の「蜂起」を阻止する行動がとられたという点を指摘した。「定松房」の行動はまさにその好例であると言えよう。

(8) この事件については、酒井紀美氏「中世社会における風聞と検断」(『歴史学研究』五五三、一九八六年)に詳しい。

(9) 「落書起請」については、渡辺澄夫氏「中世社寺を中心とする落書起請に就いて」(『史学雑誌』五六―三、一九四五年)、荻野三七彦氏「落書起請に関する一起請文への理解―東大寺知足院の本尊盗難事件に関連して」(『古文書研究』五、一九七一年)、千々和到氏「中世民衆の意識と思想」(『二揆』四、東京大学出版会、一九八一年)、瀬田勝哉氏「神判と検断」(朝尾直弘氏・網野善彦氏・山口啓二氏・吉田孝氏編『日本の社会史』五、岩波書店、一九八七年)等の研究がある。

(10) 「興福寺別当次第」四、『大乘院日記目録』等による。

(11) 「法隆寺別当次第」等による。なお、当時、法隆寺別当には興福寺僧が補任される慣例になっていた。

(12) 小泉氏及び興福寺の衆徒・国民制などについては、永島福太郎氏「奈良文化の傳流」(目黒書店、一九五一年)、同氏「奈良」(吉川弘文館、一九六三年)、朝倉弘氏「大和武士」(『奈良県史』一一、名著出版)等に詳しい。